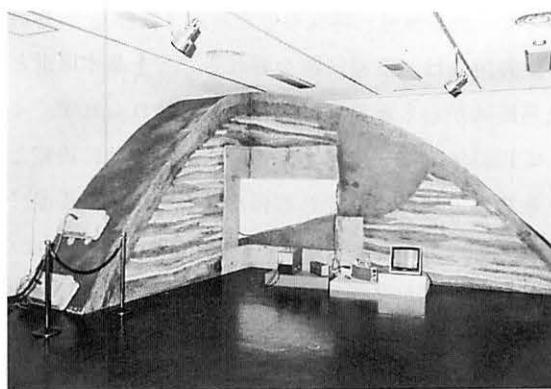


飛鳥資料館の特別展示

飛鳥資料館

特別展示「飛鳥古墳を科学する」　　近年考古学の研究に利用されるようになった、科学的な調査法について、特に飛鳥時代の古墳に応用された例を中心に、最新の技術を解り易く展示することに努めた。一つは50年前のX線写真とモノクロームガラス乾板を残すのみの阿武山古墳の例で、コンピュータを駆使した画像解析が、貴重な情報を提供したもの。劣化した原板から鮮明な画像を取り出す処理過程や、X線写真との合成で得られた古墳被葬者に関するデータをパネル、ビデオ再生装置で示すと共に、この情報から復原された玉枕、金糸の刺繡のある冠帽などの副葬品を展示した。ファイバースコープによって発掘以前に玄武の壁画を確認したキトラ古墳については、実大の墳丘模型をつくり、実物のファイバースコープを設置して調査方法を再現した。また特別展を機会に、キトラ、阿武山古墳で、電気探査、地中レーダー探査を実施しその成果をパネルで示すと共に、両古墳の実大模型をつかって、地下の遺跡を探る装置の実際の使い方も示した。新しい年代決定法として最近注目を浴びている年輪年代法についても、1コーナーを設けた。



キトラ古墳実大模型

特別展「聖徳太子の世界」　　第一展示室では、聖徳太子関連の遺跡と寺院、東橋遺跡・上之宮遺跡・橘寺・法隆寺・叡福寺と太子廟の写真パネルおよび解説により、太子の生涯をたどったが、展示の主眼はむしろ、橘寺と叡福寺に伝わる聖徳太子絵伝、東樂寺太子三才像、法隆寺南無仏太子像、太子孝養像、馬上太子像そして聖皇曼茶羅などの絵画・彫刻作品を通して、後世の人々の心の中に生きた太子の姿を浮き上らせることをおいた。同時に仏伝図中の各場面と、太子の事跡を対比することによって、太子伝説が仏陀の伝説を下敷きに形成されていった過程を目にする形で理解してもらう構成をとった。第二展示室では、玉虫厨子と壁面一ぱいに拡大した天寿国繡帳のパネルを使って、聖徳太子そして飛鳥時代の人々が抱いたであろう、天寿国の印象の再現を試みた。当館の建物構造・展示諸設備は考古遺物を主な対象としたもので、太子絵伝のように大きく数も多い画幅や、彫刻などを考慮して作られてはおらず、全体としてはかなり無理をした展示形態をとらざるを得なかった。展示そのものが大好評を得たことと、飛鳥時代の文化とその後代への影響を一般に理解してもらうためには、このような形での展示が今後も必要となることは確かだということを考えると、資料館としては重い宿題を負わされることになった特別展といえよう。

(岩本 圭輔)